

中井町・古墳時代のころ (中井町の横穴群)

山の斜面に掘られた横穴、これが昔のお墓であることはご存じの方も多いと思います。これらは「横穴墓」と呼ばれる古墳の仲間で、中井町では9か所76基が確認されています。それではこれらの「横穴墓」は、どのようにして生まれ、いつごろ、誰のために造られたものでしょう。

◎大型古墳の出現

古墳という大きな前方後円墳を思い出します。奈良盆地東南部の桜井市に現在邪馬台国の候補地の一つと考えられている「纏向遺跡」があります。この場所に三世紀始めごろ、忽然と大きな前方後円墳（纏向石塚古墳）が現れます。また同遺跡内にある「箸墓古墳」は最古の大型前方後円墳（全長276m）でヤマト王権最初の王墓という説もあります。ヤマト王権をはじめ各地の有力者たちが権威の象徴として大型の前方後円墳や円墳・方墳などを造った三世紀から七世紀までを古墳時代といいます。

◎前方後円墳の終焉

六世紀末ヤマト王権は、各地の有力首長を「国造」に任命し、「国造制」という間接的な地方支配体制を強めていきました。この制度下では、中井町は足柄平野西縁部付近が本拠地と考えられる「師長国造」の支配下にあったと考えられます。この「国造制」の成立により前方後円墳の築造はほぼ終了し、権威の象徴が墳墓の規模から威信財を主体とした副葬品へと変化していきます。そして欽明天皇の時代に伝来（五



雑色横穴墓群

200mにわたり18基の横穴が存在

三八年もしくは五五二年）した仏教の火葬思想が普及したことで、従来の死生観が変わり、古墳上に死者の魂が生活するための「黄泉国」を再現するという考え方もなくなり、寺院の建立に資源が向けられていくようになりました。最終的には「薄葬礼（六四六年）」によって身分に応じて墳墓の規模を制限したことで、前方後円墳の造営は全国的になくなりました。そして墳陵は小型簡素化されていき、身分秩序がより明確になっていきました。

◎群集墳の時代（国造制から律令制へ）

律令制が整い始めてきたころ、現神奈川県である「相模国」は、その名前が六七五年に日本書紀に登場し、六八三年～六八五年にかけて国境が定められました。このとき「師長国造」は足上、足下、余陵郡の三郡となり、中井町は余陵郡に属しました。この七世紀末ごろから各郡単位で寺院の建立が進み、地域支配のシンボルが古墳から寺院へと変わっていきます。このような古墳時代の後期・終末期（六～七世紀末）にかけては多数の小規模古墳が短期間に密集して造られ、「群集墳」と呼ばれる状態を形成しました。「群集墳」は「高塚古墳」と「横穴墓」で構成されていて、これらの墳墓は同一丘陵の尾根上に「高塚古墳」が、斜面には「横穴墓」がそれぞれ基域を構築している状況から、「高塚古墳」の被葬者が「横穴墓」を造営した集団を統括していた関係が想像できます。

◎中井町の「横穴墓」

県西部では七世紀初頭に造営が始まったと思われる「群集墳」は、足柄平野の西部と久野丘陵には「高塚古墳」が、酒匂川東岸と大磯丘陵にかけては「横穴墓」が多く分布します。中井町の「横穴墓」は七～八世紀の古墳時代末期から奈良時代にかけて、当時の戸長やその家族の墓として築造されたものですが、それは全国的にみると、すでにこのような古墳の築造は終了していた頃のことでした。

（文化財保護委員 廣澤瀧男）（参考資料「神奈川の遺蹟展図録」）